

初等日本語讀本 卷三

國語課第二室



初等日本語讀本

卷三

東京外国語大学
図書館蔵書

673771

平成 23 年度

十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
綱引	市場	小野	時問	歸り	大ソ	羊飼	草取	早起	かえ	ハ	ゴッ	オジ	モン	オ祭	遠足	清明	タネ	四季
キ	場	風	割	道	ジ	い	り	き	る	エ	ン	ン	ン	リ	リ	キ	キ	キ
.....
四十三	四十一	三十八	三十五	三十二	二十九	二十七	二十五	二十三	二十一	十八	十六	十三	十一	八	六	五	一	一

モク ロク

(補充文)

二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	一	二	三	四	五	六	七	八
夕方	大連	望山	石炭	水中	水中	あり	竈祭	新祭	花咲	花咲	花咲	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
.....
四十六	四十八	五十一	五十四	五十六	五十九	六十二	六十五	六十七	七十	七十三	七十七	八十一	八十四	八十七	九十一	九十三	九十七	百	百



氷ガトケテダンくアタ
 タカクナルト草ヤ木ガノ
 オ出シマス。あんすノ花
 ヤ、タンボボノ花ガ咲キマ
 ス。ノオフガタネマキオ
 シマス。コノコロオ春ト
 イ、マス。春ワ三月カラ

一四 季

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
(ゐ)	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	
(ゑ)	れ	(え)	め	へ	ね	て	せ	け	え	
(を)	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	

ば	ば
び	び
ぶ	ぶ
べ	べ
ぼ	ぼ

だ	ざ	が
(ぢ)	じ	ぎ
(づ)	ず	ぐ
て	ぜ	げ
ど	ぞ	ご

五月マデデス。
 春ガスギルト、アツクナリ
 マス。草ガノビマス。木
 ノハガシゲリマス。ヒマ
 ワリノ花ヤ、朝顔ノ花ガ咲
 キマス。ノオフガ草取り
 オシマス。コノコロオ夏
 トイ、マス。夏ワ六月カ
 ラ八月マデデス。



夏ガスギルト、スバシクナ
 リマス。木ノハガ色ズキ
 マス。こおりゃんガミノ
 リマス。リンゴガ赤クナ
 リマス。ノオフガ取り入
 レオシマス。コノコロオ
 秋トイ、マス。秋ワ九月
 カラ十一月マデデス。
 秋ガスギルト、さむくナリ

マス。草ガカレマス。木ノ
 ハガチリマス。北風ガ吹キ
 マス。ゆきガフリマス。ド
 ノ家デモ、火オタイテヘヤオ
 アタ、メマス。コノころオ
 冬トイ、マス。冬ワ十二月
 カラアクル年ノ二月マデデ
 ス。



二 タネマキ
 コ、ワ畠デス。のおふガ
 三人イマス。今、タネマキ
 オシテイマス。
 一バンメノ人ワ、馬ニから
 すきオひかせて、畠オスイ
 テイキマス。二バンメノ
 人ワ、タネオマイテイキマ

ス。三バンメノ人ワ、ゾノアトカラ、土オカブセテイ
キマス。
ミンナーシヨオケンメイデス。

三 清 明 節

キノオワ清明節デ、オ父サンヤ兄サント、オ墓マイリ
オシマシタ。空ワヨクハレテ、大ソオアタ、カデシ
タ。

私タチワ、オ墓オキレイニソオジオシテカラ、土オカ

ケマシタ。オ父サンワ、オ墓ニ
イロくナ物オそなえ、香オオ
タキニナリマシタ。私タチワ、
オ墓ノ前ニヒザマズイテ、テイ
ネイニオガミマシタ。
オマイリオスマシテカラ、ウチ
エカエリマシタ。ウチデワ、オ
母サンガ、イロくナゴチソオ
オコシラエテ、待ッテイラッシャイマシタ。



四遠足

私たちワ、土曜日ニ、杏花村^{カハナ}エ遠足オシマシタ。大ソ
オヨイオ天気デ、暖カイ風ガソヨ〜ト吹イテイマ
シタ。

ミンナニコ〜シテ、ナランデアルキマシタ。アル
キナガラ、オ話オシタリ、唱歌オウタツタリシマシタ。
道ノリヨオガワニワ、**ねじあやめヤ、たんほほ**ノ花ガ
キレイニ咲イテイマシタ。



岡エ上ガツテ、シバラクヤスミ
マシタ。ソレカラ、坂道オ下リ
テ川ノ岸エ出マシタ。柳ノ林
ノ中デ、小鳥ガナイテイマシタ。
川ニソツテ上ボツテ行クト、小
サナ村ガアリマシタ。ソノ村
ガ杏花村デシタ。
マモナク、關帝廟^{カンテイビョウ}ニツキマシタ。
廟ノ前ニワ大キナ池ガアツテ、

ソノマワリニ、杏ノ花ガ
 キレイニ咲イテイマシ
 タ。
 私タチワ、オマイリオシ
 テカラ、池ノソバノ草ワ
 ラニスワッテ、おべんと
 おオ食ベマシタ。
 ソレカラ、タノシクアソ
 ンデイルト、集マレノ笛



ガナリマシタ。私タチワ、又ナランデ歸リマシタ。

五 オ祭り

今日ワ廟ノオ祭りデス。
 タイコヤ、ドラノ音ガ聞コ
 エマス。
 廟ノ前ノ道ニワ、リよおが
 わに、イロくナ店ガナラ
 ンデイマス。ラッバヤ、笛



ヤ、ニンギョオナドオ賣ル店モアリマス。カザグル
 マヤ、フウセンダマオ賣ル店モアリマス。オカシヤ、
 くだものオ賣ル店モアリマス。又食べ物オ賣ル店
 モアリマス。ドノ店デモ、大キナコエデ、オ客オヨン
 デイマス。

廟ヒコヤデワ、タクサンノ人ガオガンデイマス。
 前ノ廣場デワ、しばいガハジマツテイマス。ノゾキ
 ヤ、手ジナヤ、イロ〜ナ見セ物モアリマス。
 大ソオニギヤカデス。

六 ミンナガ一生ケンメイ

アル日、一びきノロバガ、野原エ遊
 ビニ出マシタ。

マツサキニ目ニツイタノワ、カサ

サギデシタ。

「カササギサン、私ト一ショニ遊ビマ
 センカ。」

かささぎワ、コレオ聞クト、



「私ワ、スオコシラエナケレバナリマセン。」

ト言ッテ、アイテニシマセンデシタ。

コンドワ、花ニトマツテイルミツバチオ
見ツケテ、

「ミツバチサン、コチラデ遊ビマシヨオ。」

ト言イマシタ。スルト、みつばちワ、

「私ワ、ミツオ集メテイルノデス。遊ン

デワイラレマセン。」

ト言ッテ、花ノ中エ顔オ入レテシマイマシタ。



次ギワ、アリノ所エ行キマシタ。アリワ、何カ大キナ
物オひつばつてイマシタ。

アリサン、クルシイデシヨオ。少シ休ミ

マセンカ。

コレオ聞クト、アリワ、

「イヤ、ボクワ、なまけるコトワキライデス。」

ト言ッテ、見ムキモシマセンデシタ。

ロバワ、ソレカラ、馬ノ所エモ行キマシタ。牛ノ所エ
モ行キマシタ。ドコエ行ッテモ、ミンナ、一生ケンメ



イニハタライテイマシタ。
 ミンナガ一生ケンメイダ。ジブンモ遊ンデワイ
 ラレナイ。
 ロバワ、イソイデウチエ歸リマシタ。

七 オジイサン

ウチノオジイサンワ、毎日、ウラノ畠ニ出テ、野菜オツ
 クツテイラツシャイマス。ドンナ日デモ休マナイ
 デ、虫オトツタリ、コヤシオヤツタリ、草取りオシタリ

シテイラツシャイマス。
 オジイサンワ、今日、ダイコ
 ンヤ**ほおれん**そおナドオ
 カツイデ、町エ賣リニイラ
 ツシャイマシタ。オ出力
 ケニナル時、
 歸リニワ、オミヤゲオ買
 ッテ來テ上ゲマスヨ。
 トオツシャイマシタ。



八 ギツコン

バツタン

ギツコンバツタン

オモシロイ。

アナタガ上ガレバ、

ワタシガ下ガル。

ワタシガ上ガレバ、

あなたガ下ガル。



ギツコンバツタンオモシロイ。

ギツコンバツタンオモシロイ。

上ガツタト思エバ、

ストント落ちル。

落ちタト思エバ、

フワリト上ガル。

ギツコンバツタンオモシロイ。



九 ハ エ

ハエワうるさい虫デス。私ドモガ、ウチデベンキョ
オオシテイルト、頭ニ來テトマリマス。ネテイルト、
顔ニ來テトマリマス。ゴハンオ食べテイルト、ごは
んニ來テトマリマス。ソシテ、追ッテモ追ッテモ、又
來テトマリマス。

ハエワキタナイ虫デス。豚ゴヤノ中ニモ、便所ノ中
ニモ、タクサントビマワッテイマス。ソシテ、キタナ
イ物オツケタマ、デ、食べ物ノ上ニトマリマス。ソ
レオ知ラナイデ食べルト、オソロシイ病氣ニカ、ル
コトガアリマス。
ハエワホントオニイヤナ虫デス。

十 か え る

かえるわ、りくにいる時にわ、大きな目おして、手おつ
いてすわつています。そして、小さな虫がとんで來
ると、ぱくつと食べてしまします。又、のこく歩い

たり、びよんびよんとんだ
りします。

水の中でわ、上手におよぎ
まわります。又、水の上に、
ういていることもありま
す。そして、何か音がする
と、水のそこえ上手にもぐ
りこみます。



ることわ出来ません。ふなやきんぎよわ、水から出
ると、間もなく、死んでしまいます。
しかし、かえるわ、水の中にも、りくの上にも、すむこと
が出来ます。

十一 早起き

私わ、いつもより早く起きて、外え出ました。涼しい
風が吹いて大そおよい心持ちです。
あちらこちらから、にわとりのなきごえが聞こえま



す。日わまだ出ません。
 きれいな金色の雲が、東の
 空にういています。
 豚ごやでわ、豚が、ぶうく
 ないています。
 にわとりわ、とやから出て、
 えおきがしています。
 口笛お吹くと、どこからか、
 小犬が尾おふつてとんで

来ました。

日が出ました。朝顔の葉に、露がきら／＼光つてい
 ます。

十二草取り

昨日、兄さんと二人で、畠え草取りに行きました。
 畠にわ、豆の莖が長くのびていました。その間にわ、
 草がたくさん生えていました。
 私どもわ、二人できよおそおおして、一生けんめいに

取りました。

小さな草わすぐぬけました
が、大きなのわぬくのになか
なかほねがおれました。
おひるのごはんわ畠で食べ
ました。

夕方までに、すっかり取って
しまいました。
取ったあとお見ると大そお



きれいです。豆の葉わ風に吹かれて、うれしそおに
動いています。
よい心持ちになつてうちえ歸りました。

十三 羊 飼 い

羊おつれて野原え出ました。

羊わうれしそおに、あちらえ行つたり、こちらえ來た
りして遊びます。中にわ、遠くまで遊びに行くのも
あります。追っかけて行つて、むちおふると、おどろ

いて歸つて來ます。

草お食べているのもあります。小川の水お飲んでい
るのもあります。どれもこれもたのしそおです。

私わ、歌お歌つたり、草の上
ねころんだりして、羊の番お
しました。

夕方、羊おつれてうちえ歸り

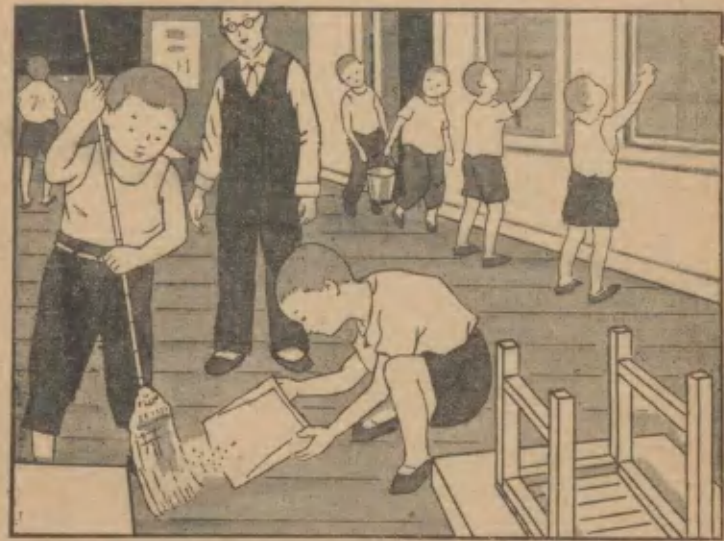


ました。高粱こあづき島の上にもお、月が出ていました。

十四 大ソオジ

私ドモワ、土曜日ニ大ソオジオシマシタ。先生モオ
イデニナツテ、イロ／＼トサシズオシテ下サイマシ
タ。

先ズ、マドオアケテ、ソレカラ、杓ヤコシカケオ後ノ方
エハコビマシタ。ソレガスムト、陳サンタチワ、ホオ
キデ床オハキハジノマシタ。李サンタチワ、紙デマ



ドガラスオフキハジメマ
シタ。
私ワ張サント、バケツニ水
オクンデキマシタ。ソシ
テ、ゾオキンオ洗ッテ、ミン
ナト一シヨニフキマシタ。
床ガ、ズンズンキレイニナ
ッテイキマス。オ話オス
ル人ワ一人モアリマセン。

ヤガテ、先生ガ、

水オカエテキナサイ。

トオッシャイマシタ。私ワ張サント二人デ、スグカ

エテキマシタ。

フキオワッテカラ、みんなデ、机ヤコシカケオナラベ
マシタ。

床モ、黑板モ、マドガラスモ、大ッオキレイニナリマシ
タ。

みんなワ、ドオグオシマイマシタ。先生ガ、

ゴクロオサマ、大ソオキレイニナリマシタ。
トオツシャイマシタ。

十五 歸り道

大そおじがすんでから、私わ張さんと一しよに、うちえ歸りました。

とちゆうで、一人のおじさんにあいました。

おじさんわ、

「ていしやばわどちらですか。」

と、おたずねになりました。

私が、

あちらです。私のうちも

あちらですから、一しよに

まいりましたよお。

と言いますと、おじさんわ、

そおですか。それわあり

がとお。

と言つて、大そおおよろこび



になりました。

私どもわ、いろく、なお話おしながら、ていしやばの見える所まで行きました。

わかるる時に、おじさんが、

「あなたがたわ何年生ですか。」

と、おたずねになりましたので、私どもが、

「三年生です。」

と答えますと、

「そおですか。日本語が大そおお手ですな。」

と、ほめて下さいました。そして、

「ありがとう。ありがとう。」

と言つて、ていしやばの方えおいでになりました。

十六 時間割

妹姉サン、明日、學校デ、クレヨンオオツカイニナリマスカ。

姉イ、エ、ツカイマセン。」

妹ソレデワ、赤ト青オカシテ下サイ。」



姉 オツカイナサイ。明日ワ圖

畫ノアル日デスネ。

妹 ハイ。

姉 ソノ外ニ何ガアリマスカ。

妹 算術ト、日本語ト、滿洲語ト、唱

歌トガアリマス。姉サンノ

方ワ。

姉 私ノ方ワ、午前ニ、修身ト、日本

語ト、算術ト、手工、午後ニ體操

ト裁縫トガアリマス。

妹 六時間デスネ。姉サンタチワ、イツモ六時間アル

ノデスカ。

姉 イ、エ、月曜日ト土曜日ガ四時間、水曜日ト木曜日

ガ五時間、火曜日ト金曜日ガ六時間デス。

妹 ズイブン時間ガオ、イノデスネ。

姉 ハイ。三年生ワ一週三十時間デス。二年生ワド

ンナ時間割デスカ。

妹 火曜日ト木曜日ダケガ五時間デ、アトワ四時間ニ

ナッテイマス。

姉スルト、一週二十六時間デスネ。」

十七 小野道風

昔、日本に、小野道風とゆう人がありました。

若い頃、字のけいこおしましたが、上手に書けませんので、困っていました。「もお、字のけいこわ、やめよお。」と思つたこともありました。

ある雨のふる日のことです。道風わ、池のそばお通

りました。池のそばにわ、大きなしだれ柳の木がありました。見ると、一びきの蛙が、そのしだれ柳の枝え、とびっこおとしています。しかし、枝が高いので、なかくとびつくことが出来ません。とんでわ落ち、落ちてわとび、何べんも何べ



んもとびつこおとしました。すると、だん／＼高く
とべるよおになつて、とお／＼柳にとびつきました。
道風わ、じつとこれお見ていました。その蛙のこん
きのよいのに感心しました。そして、「この蛙のよお
に、こんきがよければ、何でも出来ないことわれない。」と
思いました。

道風わ、その日から、一生けんめいに、字のけいこおつ
ずけました。ずん／＼上手になつて、後にわ、日本で
名高い書家となりました。

十八 市場

私ワ、昨日、オ母サント一ショニ、市場エ行キマシタ。
ハイルト、スグ、果物屋ガアツテ、梨ヤ、リンゴヤ、柿ガ、キ
レイニツンデアリマス。
ソノ次ギニワ野菜屋ガアリマス。大根ヤ、ニンジン
ヤ、ホオレンソオナドガ、山ノヨオニツミ上ゲテアリ
マス。オ母サンワ、ネギト白菜オオ買イニナリマシ
タ。



野菜屋ノトナリワ魚屋デス。
 タイヤ、カレイヤ、ソノ外イロ
 イロナ魚ガ、キレイニナラベ
 テアリマス。
 魚屋トナランデ肉屋ガアリ
 マス。ソコデワ、牛肉ヤ、豚肉
 ヤ、鶏ノ肉オ賣ッテイマス。
 オ母サンワ、コ、デ豚肉オオ買イニナリマシタ。
 出口ノ所ニ、カンズメヤ、ツケ物ヤ、ミソナドオ賣ル店

ガアリマス。大ゼイノ人デナカノ、ニギヤカデス。
 妹エ、オミヤゲニ、オ菓子オ買ッテ歸リマシタ。

十九 綱引キ

コンドワ綱引キデス。
 「白勝ツヨオニ。赤勝ツヨオニ。」
 トサケブ聲ワ、廣イ運動場ニヒバキワタッテイマス。
 「用意」ノ號令ガ勇マシクカ、リマシタ。私タチワ、兩
 手デシッカリト綱オニギリマシタ。

ビリ／＼ッ。

ト「始メ」ノ笛ガ鳴リマシタ。

「ヨイシヨ。」「ヨイシヨ。」

私タチワ、一生ケンメイニナッテ引キマシタ。應援ワ、イヨ／＼サカンニナリマス。シカシ、勝負ワナカ／＼ツキマセン。私タチワ、齒オクイシバリ、足オフンバツテ引キマシタ。スルト、綱ガ少シコチラエ來マシタ。



「モオ少シダ。」

トユウ、先生ノ聲ニ、ミンナガウント元氣オ出スト、綱ワズン／＼コチラエ來マス。

ソノ中ニ、終ワリノ笛ガ鳴リマシタ。

赤勝チ。

ト言ッテ、先生ガ旗オオフリニナリマシタ。私タチワ、トビ上ガッテ、

バンザイ。バンザイ。



トサケビマシタ。

二十夕 方

日ははいります。西の空が一面に赤くなつていま
す。ちよおど、火がもえるよおです。

夕やけ、こやけ、

はたのはたの高梁わ、

なんとせが高いな。

頭がこげるぞ。

子供が歌お歌いながら歸つて來ます。
羊も、野原から歸つて來ます。馬も牛も歸つて來ま
す。

かささが、高い木の枝で鳴いています。

夕やけ、こやけ、

空の空のかささぎわ、

なんと尾が長いな。

長い尾がこげるぞ。

子供の歌がまだ聞こえて來ます。

二十一 大連港

コ、ワ大連港デス。ドチラ
 オ見テモ船デーバイデス。
 今、一ソオノ太キナ船ガハイ
 ッテ來マシタ。大ゼイノ人
 ガ甲板ニ立ッテイマス。船
 ガ近ズクト立ッテイル人ノ
 顔ガハッキリ見エテキマス。



昭和十三年十月六日撮影 大連港 大連港

埠頭ニワ、出迎エノ人ガタクサン來テイマス。船ノ
 人モニコ／＼シテイマス。出迎エノ人モニコ／＼
 シテイマス。

船ガツキマシタ。人ガ順々ニ下リテ來マス。ミン
 ナ、ウレシソオナ顔オシテ、出迎エノ人ト一ショニ歩
 イテイキマス。人夫たちガ、イソガシソオニ、船カラ
 荷物オ下ロシハジメマシタ。

アチラノ船デワ、大ゼイノ人ガ、ヒッキリナシニ乗り
 コンデイマス。トランクオ持ッタ人モアリマス。

昭和十五年十月九日 函館支店 船務局 函館



ト、言ッテイマス。

ツ、ミオ下グタ人モアリマス。ミンナ、イソイデ乗

リマス。

人夫タチガ、ソノ船ニ、荷物オドン

ドンツミコンテイマス。

ドラガ鳴リマシタ。時間ガ來マ

シタ。船ワ動キ出シマシタ。船

ノ人モ、見送リノ人モ、手オ上ゲテ、

「サヨオナラ、サヨオナラ。」

二十二 望 小山

昔、熊岳城に、母親と子供が、二人で暮らしていました。ある日、子供わ、母親に、

「私わ、りつばな役入になろおと思ひます。山東え

試験お受けに行くことおゆるして下さい。」

と願ひました。

母親わ、子供のためお思つてゆるしてやりました。

子供わ、大そおよろこんで、船に乗つて出かけました。



ところが、その途中、嵐あらしにあつて、船とともに沈んでしまいました。

母親わ、そんな事わ少しも知らないで、子供の歸るのお待っていました。しかし、いつまでたつても歸つて來ませんでした。

母親わ、もおじつとしていら

れなくなりしました。毎日、近所の山え上ぼつて、今日わ歸るか明日わ歸るか、と海の方ばかりながめていました。雨がふつても、風が吹いても、母親が山え上ぼらぬ日わありませんでした。その中に、母親わ、とおく、病氣になりました。そして、子供の歸るのお待ちながら死んでしまいました。村の人たちわ、大そおかわいそおに思つて、山の上に塔お立てしました。そして、その山の名お望のぞ小山こやまとつけました。

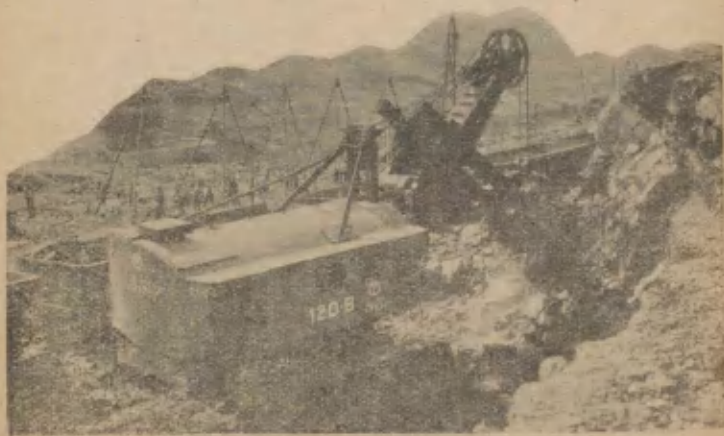
二十三 石 炭

石炭わ、大昔生えていた植物が、長い間、土の中にふかくうずもつていて出来たのです。

大そおよくもえるので、昔わ、もえる石といっていました。そして、まきと同じよおに、ごはんおたいたり、お湯おわかししたりするのにな、つかつていました。その後、石炭わいろくくな役に立つことがわかり、だんだん大切にされるよおになりました。

學校でわ、冬になると部屋おあたゝめるでしよお。部屋おあたゝめるのに一番よいのわ石炭です。

又、汽車や汽船も、石炭がなければ走ることが出来ません。いろくくな工場の機械も、石炭おたいて動かすのです。石炭から出来るガスお石炭



ガスといゝます。石炭ガスわ、物お煮るのに大そお
便利です。

その外、石炭から大切な物お、たくさんつくり出しま
す。コールタールや重油おはじめ、その數わ二百以
上にもなります。

滿洲にわ、撫順、本溪湖、阜新など、石炭の出る所がたく
さんあります。その中でも名高いのわ撫順です。

二十四 水中ノ玉

(一)

昔々、アル所ニ、二人ノ兄弟ガアリマシタ。大ソオナ
カノヨイ兄弟デシタ。
アル日、二人ワ野原エ行キマシタ。野原ニワ、キレイ
ナ川ガ流レテイマシタ。二人ワ、手オ引キ合ッテソ
ノ川オ渡リマシタ。
川ノ中ホドマデ來ルト、水ノ底ニ、何かビカ／＼光ル
物ガアリマシタ。ヒロイ上ゲテ見ルト、ソレワ五色
ニ光ル美シイ玉デシタ。二人ワ、ソレオウチエ持ッ
テ歸ッテ、箱ノ中ニシマッテオキマシタ。



アクル日、箱オアケテ見ルト、
 玉ト一シヨニ、金ヤ銀ガ一バ
 イハイッテイマシタ。二人
 ワ大ソオヨロコンデ、ソノ金
 ヤ銀オ取り出シテ、フタオシ
 テオキマシタ。
 次ギノ日、又箱オアケテ見マ
 シタ。スルト、今度モ前ノヨ
 オニ、金ヤ銀ガ一パイハイッ

テイマシタ。

ソノ後、二人ワ、何度モ何度モ箱オアケテ見マシタガ、
 イツモ金ヤ銀ガ一パイハイッテイマシタ。
 玉ノオカゲデ、兄弟ワ大金持ちニナリマシタ。

二十五 水中ノ玉 (二)

大金持ちニナッタ兄弟ワ、リッパナ家オ二ツタテテ、
 分カレテ住ムコトニシマシタ。
 オ金ヤ品物モ、同ジヨオニ二ツニ分ケマシタ。トコ

ロガ、玉ワ一ツシカアリマセンカラ、分ケルコトガ出
來マセン。兄ガ、

私ワ、モオ、オ金ワイラナイカラ、玉ワオ前ガ持ッテ
イナサイ。

ト言イマス、ト弟ワ、

ソレワイケマセン。ドオゾ、兄サンガ持ッテイテ
下サイ。

ト言ッテ、聞キマセンデシタ。

ソコデ、二人ワソオダンオシテ、ソノ玉オモトノ所エ、

カエシテ來ルコトニシマシ
タ。

二人ワ、ハジメ玉オ見ツケタ
所ニ行キマシタ。ソシテ、玉
オオコオトスルト、水ノ底ニ、
モオ一ツ同ジヨオナ玉ガ、ビ
カビカ光ッテイマシタ。

ア、兄サン、又、玉ガ。

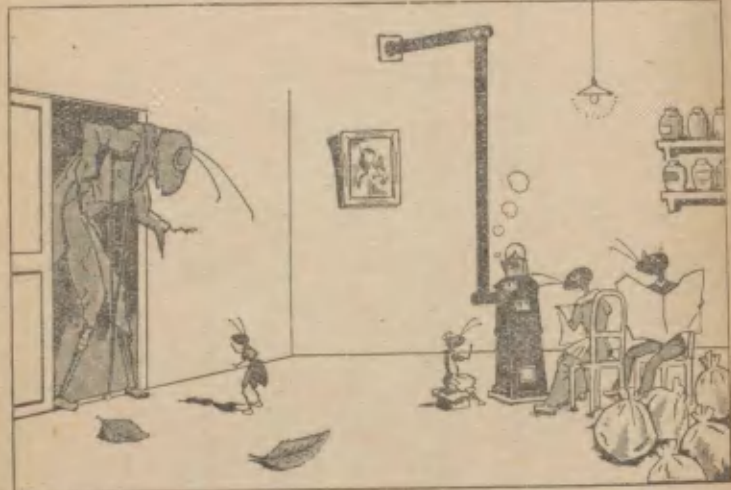
ア、ソレデワ、神様ガ、二人



ニーツズツ下サツタノニチガイナイ。
 二人ワヨロコンデ、ソノ玉オヒロツテ歸リマシタ。
 ソシテ、玉オーツズツ持ッテ、イツマデモシアワセニ
 暮ラシマシタ。

二十六 ありときりくす

北風の吹く寒い日のことです。
 一匹のやせおとろえたきりくすが、ありの家に來
 て、



「腹がへつてもお死にそお
 です。何か食べ物わござ
 いませんか。」
 と、あわれな聲で言いました。
 「あ、きりくすさんです
 か。それわお困りでしょ
 お。まあ、お上がりなさい。」
 ありわ、きりくすお部屋え
 通して、すぐ、食べ物おめぐん

でやりました。

きりくすわ、大そおよろこんで、それお食べながら
「おかげで助かりました。私わ、長い夏の間、歌ばかり歌っていて、少しも、冬の用意おしておきませんでした。それで、こんなひどいめにあいました。ほんとおにはずかしいことです。」

と、涙お流して話しました。すると、ありわ、

「もお、すぎさつたことわ仕方がありません。來年わ、一生けんめいにはたらきましょお。」

と、しんせつになくさめました。

二十七 竈祭り

十二月二十三日ワ、竈祭りノ日デス。

コノ日ニナルト、先ズ、キレイニ、竈ノ掃除オシマス。
ソレカラ、壁ニハツテアル竈ノ神様ニ、飴オソナエマス。
又、高粱ガラナドデコシラエタ、馬ヤマダサナド
オカザリマス。

祭りノ用意ガ出來上ガルト、蠟燭オツケ、線香オ立テ



テオ祭りオシマス。ソシテ、
 「神様、天ニオイデニナツタ
 ラ、ドオゾ、私ドモノシタヨ
 イ事オ、残ラズ、天ノ神様ニ
 オツシヤツテ下サイ。」
 ト祈リマス。
 ソレガスムト、竈ノ前デ、神様
 ノ繪オ馬ナドト一シヨニ焼
 キマス。

ソレカラ、外ニ出テ、サカンニ爆竹オ鳴ラシマス。爆
 竹オ鳴ラスノワ、神様が天エ、オ上ボリニナルノオ、オ
 送リスルタメデス。

壁ニワ、ヤガテ、又、新シイ竈ノ神様ノ繪オハツテ、タノ
 シイオ正月オ待チマス。

二十八 爆 竹

爆竹の音が聞こえます。
 私わ、急いで、門の外え飛び出しました。

見ると、

「ポオン、ポオン、ポオン。バチバチく。」

あちらでも、こちらでも、さかんに鳴らしています。

私も爆竹に火おつけました。

「ポオン。」

大きな音がして、耳が少し聞こえなくなりました。



その中にお母さんも、姉さんも、出ていらつしやいました。私わ、鳴らすのおやめて、一しよに見ました。

「ポオン、ポオン。」

と、鐵砲のよおな音がするのもあります。

「ドオン。」

と、大砲のよおにひゞくのもあります。高く上がった鳴るのもあれば、地面おはいまわって鳴るのもあります。姉さんが、

「お前もやつてごらん。」

とおつしやつたので、私わ又始めました。

二十九 新 京

新京わ、もと長春しんちゆんとい、ました。昭和七年三月に、満洲國の首府しゆふとなり、名も新京とかわりました。そして、數年の間に大そおきかな町となりました。町の北の方に新京驛があります。鐵道わこ、から四方に通じていて、交通が大そ便利です。驛から南えまつすぐに、廣い通りがあります。これ



らんでいます。

お大同大街とい、ます。通りの兩側に、役所や會社などのりつばな建て物が、たくさん立ちな



通り



くものすのよおに通じていま

大同大街おしばらく行くと、大同
同廣場があります。
この廣場わ町の中
心で、こから大き
な通りが、



す。

町の東にわ、宮内府があり、西にわ、忠靈塔や兒玉公園
などがあります。又、南の方にわ、滿洲事變の時、はげ
しいせんそおのあつた南嶺があります。
新京わ、大そお廣く、建て物わきれいで、ほんとおにり
つばな町です。

三十 花咲かじ、い (一)

昔々、ある所におじいさんがありました。犬お一匹



ますと、土の中から、お金やたから物が、たくさん出ました。

かつて、大そおかわいがつていました。

ある日、犬が、畠のすみで、

「こゝ掘れ、わんくゝ、こゝ掘れ、わんくゝ。」

となきました。

おじいさんが、そこお掘つてみ

となりのおじいさんわ、よくのふかい人でした。この話お聞いて、犬おかりに來ました。そして、むりに犬おなかせて、畠お掘つてみました。が、きたない物ばかり出ました。おじいさんわ、おこつて犬おころしてしまいました。

犬おかわいがつていたおじいさんわ、大そおかなしみました。そして、犬のお墓おつくつて、そこえ、小さな松お、一本うえました。

松わ、ずんくゝ大きくなりました。おじいさんわ、そ

の松の木で、白おこしらえま
した。それで米おつくと、お
金やたから物が、たくさん出
ました。

となりのおじいさんわ、又、そ
の白おかりに來ました。そ
して、米おついてみましたが、
きたない物ばかり出ました。
又おこつて、白おこわして、火にくべてしまひました。



三十一 花咲かじい (二)

犬おかわいがつていたおじいさんわ、その灰おもら
つて來ました。すると、風が吹いて來て、灰おとぼし
ました。それが、かれ木の枝にかゝると、一どにはつ
と花が咲きました。

おじいさんわ喜びました。灰おざるに入れて、
花咲かじい、花咲かじい、かれ木に花お咲かせ
ましよお。



おじいさんわ、かれ木に上ほりました。そして、灰おまきますと、かれ木に花が咲いて、一面に、花ざかりになりました。

「これわふしぎだ。きれいだ、きれいだ。」

と、言つて歩きました。との様がお通りになつて、「これわおもしろい。花お咲かせてごらん。」とおつしやいました。

とおほめになつて、ごほおびお、たくさん下さいました。

となりのおじいさんわ、残つていた灰おかき集めて、かれ木に上ほつて、との様のお歸りお待つていました。そこえ、との様がお通りになつて、

もお一ど、花お咲かせ



てごらん。」

とおつしやいました。

おじいさんわ、灰おつかんでまきました。いくらま

いても、花わ咲きません。しまいに、灰がとの様の目

や口には、はいりました。

との様わ、

「これわ、にせものだ。にくいやつだ。」

とおつしやいました。

おじいさんわ、とおくくしばらくしてしましました。

補充文

一 ウサギ

ウサギが大ゼイヨッテ、ソオダンオハジメマシタ。

「コノ山ノケモノワ、ミンナツヨクテ、イツモ、ボクタ
チオ食べヨオトスルカラ、モオ、コノ山オニゲ出ソ
オ。」

一 ピキノウサギガ、ゴオイ、マスト、

「ソオダ、ソオダ。早くヨソエウツツテシマオオ。」

ト、ミンナガサンセイシマシタ。
ソコデ、ウサギドモワ、ソロツテ、ソノ山カラニゲ出シ
マシタ。

山オ下リテ、川ノソバエ來マシタ。ソノ川ニワハシ
ガカ、ツテイマシタ。ソノハシノ上ニ、カエルガタ
クサンイマシタ。

カエルワ、ウサギノ來タノニオドロイテ、ミンナ、川ノ
中エトビコミマシタ。

コレオ見テ、一ビキノウサギガ、

「ナンダ。ヨワイケモノモアツタモノダ。ボクタ

チオオソレテ、ミンナ、水ノ中エニゲコンデシマツ
タ。」

トイツテ、笑イマシタ。

「アレワ、ケモノカシラ。」

ホカノ一ビキガタズネマシタ。

「キマツテイルヨ。足ガ四本ツイテイタデワナイ
カ。」

ミンナガコオイ、マシタ。

「ソレデワ、モオ、ケモノワコワクナイ。又モトノ山エカエロオ。」

ミンナガ、又モトノ山エカエリマシタ。

二 客サマ

アル日曜日ノ朝、花子サンガ復習フクシユオシテイマスト、

「ゴメン下サイ、ゴメン下サイ。」

トユウ聲ガ聞コエマシタ。

花子サンワ、イソイデゲンカンエ出テ、

「イラツシャイマセ。」

トイツテ、オ客サマニオジギ

オシマシタ。

オ客サマワ、メイシオオ出シ

ニナツテ

「オ父サンワ、オウチニイラ

ツシャイマスカ。」

トオツシャイマシタ。

花子サンワ、



「ハイ、ウチニイマス。チョットオ待ち下サイ。」
 トイツテ、ソノメイシオ、オ父サンノ所エ持ッテ行キ
 マシタ。

オ父サンワ、メイシオゴランニナッテ、

「オ通シナサイ。」

トオツシヤイマシタ。

花子サンワ、又ゲンカンエ出テ、

「ドオゾオ上がり下サイ。」

トイ、マシタ。



三 犬ト鳥

一羽ノ鳥ガ、木ノ枝ニトマッテイマシタ。
 下オ見ルト肉ガアリマス。

「オヤ、肉ガ落ちテイル。オイシソオダ。ヒロッテ
 食べヨオ。」

ソコエ、一ビキノ犬ガ來テ、

「ヨイニオイガスル。ア、アノ木ノ下ニ肉ガアル。
 食べテヤロオ。」

犬ガ走りヨルト、鳥ワ、スバヤク肉オ口ニクワエテ、モ
トノ木ノ枝エトビ上ガリマシタ。

「モシ、鳥君。ソノ肉ワ、ボクガサキニ見ツケタ
ノデスヨ。ボクニワタシテ下サイ。」

鳥ワ、首オフツテワタシマセン。

「ソレデワ、半分ズツ食ベマシヨオ。コチラエ下リ
テ來ナサイヨ。」

ソレデモ、鳥ワ、首オフツテ聞キマセン。

犬ワ、シバラク、何カ考エテイマシタガ、



「デワ、シカタガアリマセン。ミンナ、君ニ上ゲマス。
ソノカワリ、君ノアノヨイ聲デ、歌オ歌ツテ下サイ。
君ノ歌オ聞クト、ホントオニ、ヨイ心持チニナリマ
スカラ。」

鳥カラスワ、タチマチ、トクイニナツテ、

カア。

ト鳴キマシタ。

クワエテイタ肉ワ、バタリト落ちマシタ。

ソレデモ、鳥カラスワ氣ガツキマセン。

カア、カア、カア。

犬イヌワ、肉オヒロウト、スグニゲテシマイマシタ。

鳥カラスワ、何モ知リマセン。空ノ方オ見上ゲナガラ、

カア、カア、カア。

ト、聲オハリ上ゲテ鳴キマシタ。

四月の桂

昔、黄河カワのあたりに、吳剛ゴウカウとゆう人がいました。仙人センプンになるおと思つて、神様について教えお受けていました。ところが、神様のお氣にさわることがあつて、とおく、月の世界え追いやられました。そして、木こりにされてしまいました。

月の世界にわ、高さが五百丈もある、大きな桂の木が



います。百年たつても、二百年たつても、きりたおす

ありました。木こりの吳剛わ、その桂の木おきることお
言いつけられました。

吳剛わ、一生けんめいにおの
おふつて、夜も晝もきりつず
けました。しかし、ふしぎな
事にわ、きつてもきつてもす
ぐきり口がなくなつてしま

ことが出来ません。けれども、吳剛わ少しも休まな
いで、今でも、やはりきりつずけているとゆうこと
です。

満月の夜、氣おつけて見ると、月の中に黒い所が見え
るでしょお。あれが、吳剛のきりつずけている桂の
木だそおです。

五 廣 っ ば

こゝわ廣っばです。向こおの山に、赤い夕日がい

ろおとじています。男の子が大
ぜいたいそおごっこおしていま
す。王さんが先生です。

「氣おつけ。」

「右向け、右。」

元氣のよい號令ごうれいがかゝると、みん
な右え向いて、にこくしていま
す。

「左向け、左。」



こんどわ、みんな左え向いて、にこ
にこしています。

「前え、進すすめ。」

みんなが元氣よく手おふつて、前
え進みます。

「ぜんたい、とまれ。」

「まわれ、右。」

みんながとまって、まわれ右おし
ます。



女の子も、たくさんはねけりおし
ています。今けつているのわ金
花さんです。

「一つ、二つ、三つ、四つ。」

「あら、落ちた。」

「こんどわ、月英さんの番です。」

月英さんわ、はねお手から落と
たかと思うともおぼんくけつ
ています。



「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ。」

「まあ、お上手ね。」

みんな、月英さんおほめています。こんどわ、仙花さ
んです。みんな、大そお上手です。

六 石のいも

おばあさんが、川ばたで、いもおたくさんつんで洗っ
ていました。そこえ、乞食こじきのよおな坊ぼやさんが来て、
「おばあさん、そのいもお一つ下さいませんか。私

わ、二三日、何も食べていませんので、大そお腹がへつていますから。」

とたのみました。おばあさんわ、

「だめく。これわ食べられません。石のいもです。」

と言つたまゝ、いもお洗つていました。

坊さんわ、そのまゝだまつて、向こおの方え行つてしまいました。

坊さんが向こおの方え行くと、おばあさんわ、

「あゝ、よかつたよかつた。このおいしいいもお、一つでも取られてわ大へんだつた。」

と、ひとりごとお言いました。

いもおすつかり洗つてから、おばあさんわ家え歸りました。そして、そのいもお、鍋かまに入れて煮ゆました。

しばらくして、もお煮えただろお。」と思つて、鍋の中か
ら一つ出してみました。ところが、まだかたくて食べられませんでした。

少したつてから、又、一つ取り出して見ましたが、石の

よおにかたくて、食べられませんでした。いくら煮ても、かたくなるばかりです。とおく、ほんとおの石のいもになつてしまいました。

七 かしこい母親

昔、あるうら通りに、母親と一人の男の子が住んでいました。

家の近くに、墓場がありました。子供わ、毎日そこへ行つて、そおしきのまねおして遊びました。

母親わ、それお見て、「これわわるい。こんな所に住んでいると子供のためによくない。」と思つて、にぎやかな町えひっこしました。

すると、子供わさつそく、町お通る物賣りのまねや、お客およぶこぞおのまねばかりおし始めました。

母親わ、「こゝもいけない。」と思つて、今度わ、学校のそばえひっこしました。すると、その子供わ、本お讀んだり、字お書いたりするまねおして、遊ぶよおになりました。

母親わやつと安心して、
 いつまでもそこに住む
 ことにきめました。
 この子供わ、大きくなつ
 てから、孟子とゆうりつ
 ばな學者になりました。

八 牛と百姓

昔、ある百姓の家に、一匹の子牛が生まれました。



「やあ、りつばな牛が生まれましたね。」

「しあわせでしたね。」

村の人たちが集まって来て、みんなこお言つてほめ
 ました。

百姓わ大そお喜んで、毎日、野原えつれて行って、やわ
 らかい草お食べさせました。又、きれいな小川で、水
 おあびさせました。

子牛わ、ずん／＼大きくなりました。角もだん／＼
 のびました。

ところが、どおしたわけか、その角つわ大そお形のわるい角でした。

「へんな角だ。」

「おかしい角だ。」

と、村の人たちが言いました。

それお聞くと、百姓ひやくしやうわがっかりしました。

「何とかして角おなおしたいものだ。」と、いつも、この事ばかりお考えつずけていました。

やつと考えつきました。

「うん、そおだ。」

百姓わひとりごとお言いながら、牛おひき出して、大きな木にしばりつけました。そして、角に綱おつけて、うち中のもので、一生けんめいに引っぱりました。いくら引っぱつても、角わ少しもなおりませんでした。その中に、角わ、根もとからぼきんとおれてしまいました。

いろはにほへとちりぬる(を)わかよた
れそつねならむう(わ)のおくやまけふ
こえてあさきゆめみし(忍)ひもせすん

新語新字一覽表

(振假名附ノモノヲ新字)

一
四季。 咲キマス。 ノオフ。 タネマキ。 コロ。
春。 イ、マス。 三月。 五月。 スギル。 アツ
ク。 ナリマス。 ノビマス。 シゲリマス。 草
取り。 夏。 六月。 八月。 スバシク。 色ズキ
マス。 ミノリマス。 取り入レ。 九月。 十一
月。 サムク。 カレマス。 チリマス。 北風。
フリマス。 タイテ。 ヘヤ。 アタ、メマス。

二

冬。十二月。アクル年。二月。
氷コオリ。出イ(シ)。咲サキ(キ)。春ハル。(朝アサ顔ガハ)。夏ナツ。色イロ。入イ(レ)。
秋アキ。北キタ。火ヒ。冬フユ。陣トビ。季キ。

一バンメ。カラスキ。ヒカセテ。スイテ。
二バンメ。タネ。三バンメ。カブセテ。

島シマ。馬ウマ。

三

清明節。オ墓マイリ。アタ、カ。オ墓。ソ
オジ。カケマシタ。ソナエ。香。オタキニ
ナリマシタ。ヒザマズイテ。テイネイニ。

四

オガミマシタ。オマイリ。スマシテ。
(オ)父トコ(サン)。兄ニイ(サン)。墓ハカ。込コ(ソオ)。香コホ。前マエ。
(オ)母カハ(サン)。待マツ(ツテ)。
遠足。土ヨオ日。杏花村。オ天氣。ソヨソ
ヨト。アルキナガラ。唱歌。ウタツタリ。
ネジアヤメ。シバラク。坂道。岸。柳。林。
ソツテ。上ボツテ。アリマシタ。關帝廟。
廟。アツテ。マワリ。オベントオ。食ベマ
シタ。タノシク。集マレ。笛。

五

仕(フ)ヨオ日。遠(エシ)足(ソク)天(テン)氣(キ)暖(ヌク)カイ。話(ワタシ)
 唱(ウタ)歌(カ)岡(オカ)坂(サカ)仄(ヘリ)リテ。岸(キ)柳(ヤナギ)林(ハヤシ)
 仕(ノ)ボル。杏(アヲ)集(ツ)マレ。笛(フエ)歸(カエ)リ。
 タイコ。ニンギョオ。ナド。賣ル。フウセ
 ンダマ。オ客。オガンデ。廣場。シバイ。
 ハジマツテ。ノゾキ。手ジナ。見セ物。ニ
 ギヤカ。
 祭(マツリ)リ。賣(ウ)ル。客(キヤク)廣(ヒロ)場(バ)。
 アル日。マツサキニ。ツイタ。カササギ。

六

遊ビマセン。聞ク。ス。コシラエ。ナケレ
 バ。ナリマセン。アイテ。シマセン。トマ
 ヲツテ。ミツバチ。遊ビマシヨオ。スルト。
 ミツ。集メテ。イラレマセン。次ギ。所。
 ヒツパツテ。クルシイ。休ミマセン。ナマ
 ケル。キライ。見ムキ。牛。ジブン。イラ
 レナイ。
 野(ノ)原(ハラ)遊(アソ)ビ。言(イ)ツテ。次(ツ)ギ。所(トコロ)何(ナニ)。
 少(ス)シ。休(ヤス)ミ。牛(ウシ)生(シ)。

七

ウラ。野菜。ドンナ。トツタリ。コヤシ。
ヤツタリ。ホオレンソオ。賣リ。オ出カケ
ニナル。歸リ。

毎(日)。野(菜)町。

八

ギッコンバツタン。上ガレバ。ワタシ。下
ガル。上ガツタ。思エバ。ストン。落ちル。

下(ガ)ル。落(チ)ル。

九

ハエ。ウルサイ。ベンキョオ。追ッテ。キ
タナイ。豚ゴヤ。便所。トビマワツテ。ツ

十

ケタ。マ、。知ラナイデ。病氣。カ、ル。
イヤナ。

頭。追(ツ)テモ。豚。便(所)。病(氣)。

かえる。りく。来る。ばくつと。しまいま
す。のこく。歩いたり。びよんびよん。
とんだり。およぎまわります。ういて。も
ぐりこみます。出来ません。死んで。しか
し。すむ。

來(ル)。歩(イ)タリ。止(手)。間(モ)ナク。死(ン)デ。

十一

いつも。あちらこちら。出ません。金色。
ふうく。とや。え。さがして。口笛。小
犬。露。きらく。

起(キ)。涼(シイ)。心(ココロ)。持(チ)。金(キン)色。東(ヒガシ)葉。

露(ツキ)。光(ヒカ)ツテ。

十二

豆。間。私ども。きよおそお。取りました。
ぬけました。ぬく。ほねがおれました。お
ひる。すつかり。取つた。あと。うれしそ
おに。

十三

昨日。豆。莖。間。性(エテ)。夕(タタ)方。動(ウツ)ク。
羊飼。い。羊。行つたり。來たり。追っかけ。
ふる。おどろいて。小川。たのしそお。歌。
ねころんだり。番。

羊(ヒツ)。飼(カ)イ。遠(トホ)ク。小(コ)川。飲(ノ)ンデ。歌(ウタ)番。

十四

オイデニナツテ。サシズ。先ズ。マド。コ
シカケ。ハコビマシタ。陳(チン)タチ。ホオキ。
床。ハキハジメマシタ。マドガラス。フキ
ハジメマシタ。クンデ。ゾオキン。フキマ

十五

シタ。ヤガテ。カエテ。キナサイ。フキオ
 ワツテ。ドオグ。シマイマシタ。ゴクロオ
 サマ。
 曜コホ。洗マ(ズ)。机ツク。後コノ。陳チン。床トコ。洗アツテ。黒クロ。板イタ
 歸り道。あいました。おたずねになりました
 た。まいりましたよ。そおですか。およろ
 こびになりました。見える。わかれる。あ
 なたがた。何年生。答えます。お上手。ほ
 めて。

十六

答コタ(エ)。(日本語)

時間割。クレヨン。オツカイニナリマス。
 姉。イ、エ。ツカイマセン。オツカイナサ
 イ。満洲語。午前。手工。午後。裁縫。六
 時間。月曜日。四時間。火曜日。木曜日。
 五時間。水曜日。金曜日。ズイブン。オ、
 イ。一週。三十時間。ダケ。二十六時間。
 時ツ。間カン。割カツ。妹イモ。姉ネ(サン)。明日アス。學ガク。校コウ。姉アネ
 外カ。滿マン。洲シュ。手テ。工コウ。月グツ(曜日)。火カ(曜日)。

十七

〔木〕曜日。〔水〕曜日。週。

小野道風。ゆう。若い。書けません。困つて。やめよお。思つた。ある。ふる。しだれ柳。とびつこお。とび。とべる。とびつきました。こんき。感心しました。よければ。出来ない。ない。つずけました。後。名高い。書家。昔。若(イ)。頃。書(ケ)。困(ツ)テ。通(リ)。蛙。枝。感。心。後。名。書。家。

十八

市場。ハイル。果物屋。梨。柿。野菜屋。ニンジン。ツミ上ゲテ。ネギ。白菜。オ買イニナリマシタ。魚屋。タイ。カレイ。魚。肉屋。牛肉。豚肉。鶏ノ肉。出口。カンズメ。ツケ物。ミソ。市。果(物)。屋。梨。柿。〔大〕根。〔白〕菜。魚。肉。〔牛〕肉。鶏。菓。子。綱引キ。サクブ。ヒバキワタツテ。勇マシク。シツカリト。綱。ニギリマシタ。

十九

二十

ビリくッ。始メ。ヨイシヨ。引キマシタ。
 イヨく。ツキマセン。齒。クイシバリ。
 フンバツテ。モオ。ユウ。ウント。終ワリ。
 勝ち。オフリニナリマシタ。トビ上ガツテ。
 バンザイ。サケビマシタ。
 綱。引(キ)。勝(ツ)。聲。運。動。用。意。
 勇(マシク)。兩(手)。始(メ)。鳴(リ)。勝負。齒。
 元(氣)。冲。終(ワリ)。旗。
 西。もえる。夕やけ。こやけ。なんと。せ。

二十一

こげる。ぞ。歌いながら。
 西。面。(子供)。
 大連港。一ソオ。甲板。近ズク。ハツキリ。
 見エテ。埠頭。出迎エ。順々ニ。ウレシソ
 オナ。人夫たち。下ロシハジメマシタ。ヒ
 ッキリナシニ。乗リコンデ。トランク。持
 ッタ。下ゲタ。ドンく。ツミコンデ。動
 キ出シマシタ。見送り。上ゲテ。
 (大連港) 船。甲。板。迎(エ)。順。(人夫)

二十二

荷物。乗(リ)。送(リ)。

望小山。熊岳城。母親。暮らして。役人。

なるお。山東。試験。受け。ゆるして。願

いきました。ため。ところが。嵐。あつて。

ともに。沈んで。そんな。たつて。來ませ

ん。いられなく。近所。ながめて。上ぼら

ぬ。待ちながら。塔。立てました。つけま

した。

母親。暮(ラシ)。役。試。驗。受(ケ)。願(イ)。

二十三

途。中。沈(ンデ)。事。近(所)。海。塔。

大昔。植物。ふかく。うずもつて。いて。

出來た。もえる石。まき。同じ。たいたり。

お湯。わかしたり。その後。役。立つ。わ

かり。大切。される。あたゝめる。走る。

工場。機械。動かす。ガス。石炭ガス。煮

る。便利。大切な。つくり出します。コー

ルタール。重油。數。二百。以上。滿洲。

撫順。本溪湖。阜新。出る。

二十四

石^{イシ} 炭^{ツグ} 植^{ウエ} 物^{モノ} 同^{ドウ}(シ) 湯^ユ (大^{ダイ}切^{セツ}) 部^ベ(屋^ヤ)
 汽^キ 陣^{ジン} 船^{セン} 利^リ 數^{スウ} 以^イ(上^{ジョウ})
 水中^{スイチュウ} ナカ。引^{ヒキ}キ合^{アヒ}ッテ。ビカ^{ビカ}く。光^{ヒカル}ル。
 ヒロイ上^{ウヘ}ダテ。美^ミシイ。箱^{ハコ} シマッテ。オ
 キマシタ。金^{カネ}。銀^{ギン}。取^{トル}リ出^デシテ。フタ。見
 マシタ。何^{ナニ}度^{タビ}。オカゲ。大^{ダイ}金^{カネ}持^{モチ}チ。
 玉^{タマ}。兄^{ケイ}。弟^{テイ}。流^{リウ}(レ) 合^{アヒ}(ッ)テ。渡^{ワタ}(リ) 底^{ソコ}。
 (五^イ)色^{シキ}。美^{ウツクシ}(シイ) 箱^{ハコ} 銀^{ギン} 冷^{ヒヤ}度^{タビ}。
 タテテ。分^{ワケ}カレテ。住^{スミ}ム。品^{シモノ}物^{モノ}。分^{ワケ}ケマシ

二十五

二十六

タ。分^{ワケ}ケル。兄^{ケイ}。イラナイ。イナサイ。聞^ク
 キマセン。モト。カエシテ。見^ミツケタ。オ
 コオ。神^{カミ}様^{サマ}。下^{シタ}サツタ。チガイ。ヒロッテ。
 シアワセニ。暮^クラシマシタ。
 分^{ワケ}(カレ) 住^{スミ}(ム) 品^{シモノ} 兄^{ケイ} 弟^{テイ} 神^{カミ} 様^{サマ}
 きりくす。やせおとろえた。腹^{ハラ}。へつて。
 死^シにそお。ごさいません。あわれな。まあ。
 通^{トウ}して。めぐんで。食^クべながら。助^{タケ}かりま
 した。歌^{ウタ}つて。おきません。それで。こん

な。ひどいめ。はずかしい。涙。流して。
話しました。すぎさつた。仕方。來年。は
たらきましょお。しんせつに。なくさめま
した。

寒(イ)。(一匹)匹。腹。助(カリ)助。涙。仕(方)方。來(年)年。

二十七

竈祭り。十二月二十三日。竈。ハツテ。飴。
ソナエマス。高粱ガラ。コシラエタ。マダ
サ。カザリマス。祭り。出來上ガル。蠟燭。
線香。天。オイデニナツタラ。シタ。残ラ

二十八

ズ。オツシャツテ。祈リマス。燒キマス。
鳴ラシマス。鳴ラス。オ上ボリニナル。オ
送り。タノシイ。待チマス。
竈。掃。除。壁。飴。線。殘(ラズ)ズ。祈(リ)リ。
繪。燒(キ)キ。爆。竹。新(シイ)イ。
飛び出しました。ポオン。パチ。聞こえな
く。ポオン。鐵砲。よおな。ドオン。大砲。
ひゃく。鳴る。あれば。地面。はいまわつ
て。お前。やつて。おつしやつた。

二十九

急(イッ)イデ。飛(ヒ)ビ。鐵砲(テッポウ)。地(チ)面(メン)。

新京。長春。昭和七年三月。首府。名。

かわりました。數年。さかんな。北。新京

驛。鐵道。四方。通じて。交通。驛。南。

通り。大同大街。役所。會社。建て物。立

ちならんで。大同廣場。中心。くも。宮内

府。忠靈塔。兒玉公園。滿洲事變。はげし

い。せんそお。南嶺。廣く。されい。

(滿洲國)驛。(鐵道)通(ジ)。交(通)南。同。

三十

街(ガイ)側(ソバ)會(カイ)社(シャ)建(ケン)テ。

花咲かじ、い。かつて。かわいがつて。掘

れ。掘つて。たから物。よく。ふかい。話

かり。むりに。なかせて。おこつて。ころ

して。かなしみました。松。うえました。

白。こしらえました。米。つく。こわして。

くべて。

掘(カ)レ。松(マツ)。白(シロ)。米(コメ)。

灰。もらつて。とばしました。かれ木。か

三十一

かる。ばつと。ざる。咲かせましょお。と
 の様。お通りになつて。咲かせて。まきま
 す。花ざかり。ふしぎ。おほめになつて。
 ごほおび。残つて。かき集めて。上ぼつて。
 お歸り。一ど。つかんで。まきました。い
 くら。咲きません。しまいに。はいりまし
 た。にせもの。にくい。やつ。しばらく
 灰ハイ喜キ(ビ)。

昭和八年三月三十一日初版發行
 昭和十五年十一月三十日改訂三版發行



初等日本語讀本 卷三
 定價 金拾五錢

發行者 大連市兒玉町七番地
在滿日本教育會 教科書編輯部

印刷者 大連市大江町二番地
 荒木猪象

印刷所 大連市大江町二番地
 株式會社日清印刷所

發行所 大連市兒玉町七番地
在滿日本教育會 教科書編輯部

